

足袋

島崎藤村

青空文庫

「比佐ひささんも好いけれど、アスが太過ぎる……」

なかげまち

仙台名影町の吉田屋という旅人宿兼下宿の奥二階で、そこからある学校へ通っている年の若い教師の客をつかまえて、頬ほっぺた辺なまりの紅い宿の娘がそんなことを言つて笑つた。シとスと取違えた訛のある仙台弁で。

この田舎娘の調からかい戲からかい半分に言つたことは比佐を喫びつくり驚おどろさせた。

彼は自分の足に気がついた……堅く飛出した「つとわら」の肉に気がついた……怒つたような青筋に気がついた……彼の二の腕のあたりはまだまだ繊細かほそい、生白いもので、これから漸ようやく肉も着こようといふところで有つたが、その身体の割合には、足だけはまる

で別の物でも継ぎ合わせたように太く頑固がんこに発達していた……彼は眞ほんとう実に喫驚きつせいした。

散々歩いた足だ。一年あまりも心の暗い旅をつづけて、諸国の町々や、港や、海岸や、それから知らない山道などを草臥くたびれるほど歩き廻った足だ。貧しい母を養おうとして、僅わずかな銭取のため毎日二里ほどずつも東京の市街まちの中を歩いて通ったこともある足だ。兄や叔父の入った未決檻みけつかんの方へもよく引擦ひきずって行った足だ。歩いて歩いて、終しまにはどうにもこうにも前へ出なく成つて了った足だ。日の映あつた寢床の上に器械のように投出して、生きる望みもなく震えていた足だ……

その足で、比佐は漸くこの仙台たどへ辿り着いた。宿屋の娘にそれ

を言われるまでは実は彼自身にも気が着かなかつた。

ここへ来て比佐は初めて月給らしい月給にもありついた。東京から持って来た柳行李やなぎごころりには碌ろくな着物一枚入っていない。その中には洗さらい晒かすりした飛白ひとえの単衣だの、中古で買求めて来た袴はかまなどがある。それでも母が旅の仕度だと言つて、根気に洗濯したり、縫い返したりしてくれたものだ。比佐の教えに行く学校には沢山アメ亜米利加人の教師も居て、皆そろ揃なりつた服装をして出掛けて来る。なにがし大学を卒業して来たばかりのような若い亜米利加人の服装などは殊ことに目につく。そういう中で、比佐は人並に揃なりつた羽織袴も持つていなかった。月給の中から黒い背広を新規あつちに誂あつちえて、降つても照つてもそれを着て学校へ通うことにした。しかし、その新

調の背広を着て見ることにすら、彼には初めてだ。

「どうかして、一度、白足袋たびを穿はいて見たい」

そんなことすら長い年月の間、非常な贅ぜいたく沢たくな願いのように考えられていた。でも、白足袋ぐらいのことは叶かなえられる時が来た。

比佐は名影町の宿屋を出て、雲齋底うんさいぞこを一足買い求めてきた。

足袋屋の小僧が木の型に入れて指先の形を好くしてくれたり、滑なめらかな石の上に折重ねて小さな槌つちでコンコン叩たたいてくれたりした、

その白い新鮮な感じのする足袋の綴と紙を引き切つて、甲高な、不恰好ぶかつこうな足に宛行あてがつて見た。

「どうして、田舎娘だなんて、真実ほんとに馬鹿に成らない……人の足の太いところなんか、何時の間に見つけたんだらう……」

醜いほど大きな足をそこへ投出しながら、言つて見た。

仙台で出来た同僚の友達は広瀬川の岸の方で比佐を待つ時だつた。漸く貧しいものに願いが叶つた。初めて白足袋を穿いて見た。それに軽い新しい麻裏草履ぞうりをも穿いた。彼は足に力を入れて、往來の土を踏みしめ踏みしめ、雀躍こおどりしながら若い友達の方へ急いだ。

青空文庫情報

底本：「旧主人・芽生」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年2月15日初版発行

1970（昭和45）年2月15日2刷

入力：紅邪鬼

校正：富田倫生

1999年12月11日公開

2003年10月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

足袋

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>